

102 消化器癌に対するCA19-9およびELSA- AFP RIAキットの臨床的応用

下江俊成, 湯本泰弘, 徳山勝之, 神野健二,
和田俊裕, 森田 稔, 稲月伸一(四国がんセンター),
荒木康之(岡大一内)

〔対象および方法〕消化器癌 145 例のうち胃癌 35 例, 大腸直腸癌 13 例, 肝細胞癌 25 例, 胆道系癌 42 例, 膵癌 29 例並びに良性消化器疾患 142 例(このうち慢性肝炎 肝硬変 62 例)と健常人 11 例の計 298 例である。患者血清の CA19-9, AFP を CIS の RIA 法にて測定した。又膵疾患 44 例については, 血清エラスターゼⅠも合わせて測定して検討した。なを CA19-9 は $37 \mu\text{g}/\text{ml}$ 以下, elastaseⅠは $400 \text{ ng}/\text{dl}$ 以下, AFP $20 \text{ ng}/\text{ml}$ 以下を正常値とした。〔結果〕消化器癌では, 胃癌で 34%, 大腸直腸癌で 23%, 肝細胞癌で 36% の陽性率であり, 混合型肝細胞癌の一例で, CEA $22 \text{ ng}/\text{ml}$, AFP $17.9 \text{ ng}/\text{ml}$ と正常値を示したのに対して CA19-9 濃度のみが $2,520 \mu\text{g}/\text{ml}$ と高値を示した 1 例があった。肝内胆管癌を含む胆道系癌で 74%, 膵癌で 76% の高い陽性率を示し, 膵癌, 胆道系癌のスクリーニングに CA19-9 が有用であった。黄疸を有する患者の胆汁および胆道系胆癌患者の胆汁中 CA19-9 濃度は高値を示した。膵癌においては, 血清 CA19-9 とエラスターゼⅠを組合せることによって, 検出率の向上をみた。

103 膵分泌性トリプシン・インヒビター(PSTI)のRIAに関する基礎的ならびに臨床的検討(2)

則武昌之, 芳賀博光, 桂田光彦(陸上自衛隊札幌地区病院内科) 鬼原 彰(札幌医大衛生短大内科)

Pancreatic secretory trypsin inhibitor (PSTI) は分子量 6242 で膵酵素と共に膵液中に分泌され, 正常人血中にも存在する。今回はその RIA に関する基礎的検討に加え, 臨床的検討として膵炎発症に関与するアルコール多飲者における血中 PSTI の動態を検討した。PSTI・RIA キットはシオノギ製 0931-S を用い, とくにカラムクロマトグラフィーおよび濾紙電気泳動法により ^{125}I -標識 PSTI の検定を行った。その結果前者においては第 2 ピーク部分は 86.3 % を占め, 残り 13.7 % が重合分子あるいはフラグメントと考えられた。後者については ^{125}I -標識 PSTI の放射活性は原点附近に 92.5 % がとどまり, 7.5 % が血清蛋白と共に移動した。次に臨床検討では慢性アルコール症患者の血中 PSTI は約半数において有意の上昇を示し, 同一症例における血中トリプシンと比較的高い相関性を認めた。一方入院断酒後の変化をみると, 血中に上昇した PSTI は約 3 週間後にもみるべき低下を示さなかった。以上より RIA による血中 PSTI の測定は膵炎の発症や病態を明らかにする上に有用であると考えられた。

104 血清膵分泌性 trypsin inhibitor (PSTI) 測定の臨床的意義

加藤正人, 片岡慶正, 足立勝也, 山根行雄, 衣笠勝彦, 加嶋 敬, 瀧野辰郎 (京府医大 三内)

PSTI は膵腺房細胞より膵液中に分泌される一方, 血中にも存在する。最近, 血清 PSTI を RIA 法で測定することが可能となり, 膵疾患の診断や悪性腫瘍のスクリーニングに有用であることが, 報告されている。

今回, PSTI RIA Kit (シオノギ) を用いて血清アミラーゼや CA19-9 と対比することによって, PSTI の臨床的意義に検討を加えた。①急性膵炎では, 血清アミラーゼと同様に血清 PSTI の上昇がみられたが, その経過における血清 PSTI の変動は膵酵素と必ずしも平行せず, 正常化も遷延していた。②慢性膵炎, 膵癌の血清 PSTI 平均値は健常人よりも有意に高かった。③悪性腫瘍では血清 PSTI と CA19-9 との間に有意な相関は認められなかった。④膵癌およびその他の悪性腫瘍においても異常出現頻度は血清 PSTI の方が CA19-9 よりも高かった。⑤血清 PSTI は, 肝硬変, 糖尿病, 腎不全において高値を示し, その判定に注意を要する。

以上の成績から血清 PSTI は膵疾患臨床における新しい指標, さらに膵癌をはじめとする悪性腫瘍のマーカーになりうることを示唆された。

105 体液および胎盤中の CA 12-5 に関する研究

浜津尚就, 山崎 武, 越智幸男*, 細田四郎**, (滋賀医大 放, 中検*, 内**), 浦 恭章, 梶田芳弘 (南丹病院 内), 八谷 孝(京府医大 内)

CA 12-5 は卵巣癌の腫瘍マーカーとして臨床的に繁用されている。しかし, 卵巣癌や子宮癌以外に胃癌, 肝癌, 胆嚢癌, 膵癌, 肺癌等においても陽性がしばしば認められている。これらの患者血清中の CA 12-5 抗原は分子量約 50 万の糖蛋白という成績を得ている。CA 12-5 は正常者の唾液にも存在し, また特に胎盤中に多量 ($1,000 \text{ U}/\text{wt}(\text{g})$) 存在していた。唾液や胎盤抽出物をゲル濾過すると, 分子量約 50 万のところに溶出された。CA 12-5 は 65°C , 10 分処理では失活しないが, 100°C , 30 分では失活した。Neuraminidase 処理では活性は不変であった。CA 12-5 と胎盤性アルカリフォスファターゼ (PALP) 共に妊婦血中に高値であり, また組織分布も類似している。しかし, 癌患者血中の CA 12-5 値と PALP 活性は相関はなかった。PALP は血清, 唾液および胎盤抽出物 ($333 \text{ U}/\text{wt}(\text{g})$) のゲル濾過で分子量約 13 万の分画に存在していた。胎盤から部分精製した PALP は CA 12-5 活性を示したが, 更に精製した場合は CA 12-5 活性を示さなかった。CA 12-5 抗原と PALP との免疫学的交叉性について検討したので報告する。